

# 出自と対立構図

陸奥話記に「奥六郡の主」とか、「俘囚の長」という言葉遣いをされていることから、安倍氏はエミシだったという考え方が強かった。これが、ごく最近までの安倍氏の見方だった。

つまり、現地のエミシが取り立てられ、在庁官人になり奥六郡を支配。北方にまで勢力を広げていったという見方である。したがって、エミシ出自といふことの当然の帰結として、前九年合戦があったとみるのが一般的だった。

前九年合戦というの

倍氏の12柵が、北上川の

は、皆さんよくご存じの通り、源頼義が安倍氏と対立し、安倍氏を滅ぼしてしまっただけである。では、どうして安倍氏が源頼義に滅ぼされなければならなかったのか。それは安倍氏がエミシだったから。エミシは中央政権と対立するものだからという目でみられていたわけである。

陸奥話記に出てくる安倍氏の出自を見直す考え方が出された。中央に「阿倍氏」という有名な、奈良時代以前から続く名家がある。その軍事貴族阿倍氏の1人が下向してきて、土着し、在庁官人化したのだという考え方が出された。

安倍氏が中央貴族の一員ということになると、安倍氏がエミシだったから、最終的に中央政府と

対立することになったという単純な図式では理解できなくなる。しかし、中央政府から阿倍氏が下向してきたと見たら、どうして前九年合戦で、鎮守府將軍の源頼義と対立しなければならなかった。

どうして在庁官人である安倍氏が、源頼義と対立しなければならなかったのか。このところに十分な説明が加えられないままに、過ぎているように思われる。

前九年合戦というのは、私は、鳥海柵跡が国指定を受けるための委員会に、最初から加わらせていただいている。最初の集まりの時、配られた図を見て驚いた。



四面廂建物跡や墨書土器「五保」が出土した鳥海区域西部の遺構配置図

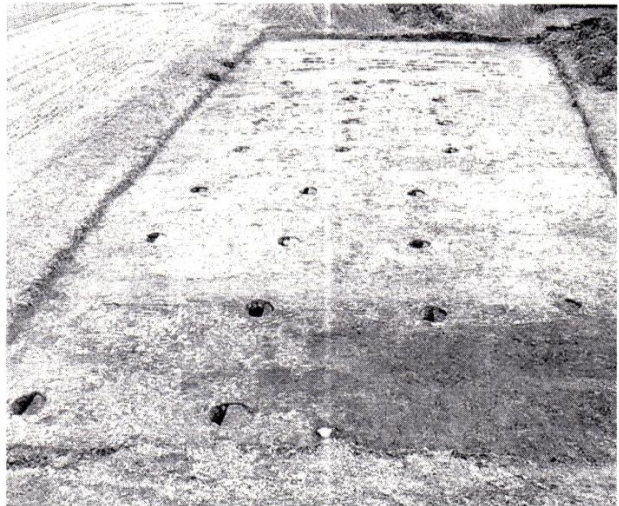
## 金ヶ崎の国指定史跡 鳥海柵を知る

— 2014 シンポジウムより —



大平 聡氏 (宮城学院女子大教授) 基調講演

### 「鎮守府胆沢城から鳥海柵へ」 IV



遺跡の南端、東北自動車道西側から見つかった四面廂建物跡

何の戦いだったのか。「エミシ対中央政府」という見方ではなく、在庁官人としての安倍氏が、鎮守府將軍と対立したんだという見方をしなければいけません。文獻資料は非常に限られている。陸奥話記は豊富な情報を伝えてくれているが、そもそも安倍氏はどうやって在庁官人になったのかということについては、語ってくれていない。9世紀、10世紀の実態、具体像は謎と言ってもよい。

鳥海柵の遺構全体図の南の端、胆沢川に面する河岸段丘上、高速度路の西側に四面廂建物と記してある。そのすぐ西側には、墨書土器「五保」の出土遺構が並んでいる。委員会が始まった時は、まだ五保の墨書土器が出ていなかったから、四面廂建物だけだったのが、それが10世紀の後半から11世紀のものであるということを担当者から聞き、驚いた。

要するに、「陸奥話記」に見える安倍氏よりも前の時代の建物の跡であり、しかも、四面廂である。四面廂というのは、母屋の周り全てに廂が付くという非常に格式の高い建物で、普通の建物ではない。

四面廂建物があるというのを聞いて、安倍氏以前にもこんなふうに使われていたのかということに驚いた。これはどう考えても、胆沢川の南に展開している胆沢城を考えなければならぬだろう。